

日本におけるペットロス研究の動向と展望

二階堂千絵¹ 安藤孝敏² 梶原葉月³

The past and future of pet loss study in Japan: A literature review

Chie Nikaido, Takatoshi Ando, Hazuki Kajiwara

目的：本稿では、学術研究においては比較的新しい概念である「ペットロス」について、我が国におけるペットロスについての研究の動向を振り返り、ペットロスに関する研究の今後の可能性を探ることを目的とする。

方法：「ペットロス」、「ペット and 喪失」、「ペット and 死別体験」をキーワードに、Google Scholar, CiNii, J-Stage, 医学中央雑誌に収録されている文献を1998年から2018年9月現在の期間を限定して、研究対象者の年齢範囲は問わず、またペットロスというテーマ自体が学際的なものであることを考慮して学問領域を限定せずに文献を収集した。検索された論文のうち、総説及び概説、症例報告、単行書、会議録、学会抄録以外の、オリジナルな知見を示した23本の文献について検討した。

結果と考察：1) テクニカルタームとしての「ペットロス」の広がりや浸透、2) 若年層及び成人を対象とした研究の多さと中高年～高齢者を対象とした研究の少なさ、3) ペットロスへの理解を深める研究の必要、4) 心理社会的な視点からの研究の必要が明らかになった。今後はライフサイクルや飼い主のライフステージを意識しつつ、高齢期に差し掛かっている飼育者のペットロスについて知見を深め、飼い主個人の精神活動などの心理的側面だけでなく、周囲との相互作用など社会関係も意識した研究が必要と考える。

キーワード：ペットロス, コンパニオンアニマル, 喪失, 悲嘆, 文献レビュー

はじめに

我が国にペットブーム到来と言われて久しい。宇都宮(1999)によれば1950年代の高度経済成長期を背景に、日本スピッツに代表される、比較的小柄な愛玩犬でありながらもよく吠えて番犬に適した犬の需要が高まったことによる第1次ペットブームが起こった。その後1960年代から番犬として好まれていた犬種に替わって「豊かさの象徴」であるマルチーズを始めとした小型室内犬が好まれ始め、第2次ペットブームを迎える。小型犬は日本の住宅事情もあり、それからも人気を保ち続け、1970年代からはポメラニアン、ヨークシャー・テリアが、1980年代にはダックスフントが人気犬種となり、第2次ペットブームは1980年代まで続いたという(宇都宮, 1999, pp. 138-141)。

これとあわせて内閣府による調査結果からペット飼育の状況の推移をたどると(内閣府, 2010)、ペットの種類として最も多いのは犬で、1979年には46.1%だったものが2000年には63.8%に達した。2003年の調査から減少傾向にあるが、それでも58.6%と高い水準にある。猫は1990年以来微増を続け、2010年には30.9%と犬と人気を二分している。

つまりこの40年の間に、犬は番犬から、猫はネズミ捕りから、それぞれ伴侶動物(コンパニオンアニマル)へと変わったと考えられる。実用から癒しへの転換である。

1980年代以降について宇都宮は言及していないため補足すると、1990年代から2000年代初頭にかけて、コマーシャルに登場したチワワが人気犬種に仲間入りし、都市部でペット飼育可のマンションが登場し始めた。またペットフード、ペット用品、生体やペット美容室、ペット医療、ペット保険、ペットホテルなどの関連サービスを含むペット産業の市場は、2017年には1.5兆円を超え、2018年にはさらに拡大する見込みである(矢野経済研究所, 2018)。以上のことから、現在に至るまでのこの時期を、第3次ペットブームと呼んで差し支えないだろう。

¹ 横浜国立大学大学院環境情報学府

² 横浜国立大学大学院環境情報研究院

³ 立教大学社会福祉研究所

人と動物の関係がこれらいくつかの重要な転換点を経る中で、1980年代に癒しや絆を求めてペットを飼い始めた多くの人々が、使役動物ではない伴侶動物たちとの死別とそれによる悲嘆を経験し始めたのがこの第3次ペットブームの頃であり、「ペットロス」という新たなトピックが注目されるようになったのも同時期である。

1998年に出版された鷺巣編による『ペットの死、その時あなたは』を始めとして、ペットロスのケアについての海外書籍の翻訳(Nieburg & Fischer, 1996 吉田・竹田訳 1998)や、一般書も含めペットロスについての書籍が出版されはじめ、広辞苑にも第六版(2008)からペットロスが掲載されるなど、言葉としては社会的な知名度を増していったと考えられる。先述した鷺巣やNieburgらは、ペットとの死別とその悲嘆について、具体的な理解とケアについてわかりやすく論じたという点で先駆的であり、ペットとの死別に際してこれまでにない悲嘆に暮れる喪失者のケアに大きく寄与したことは想像に難くない。

一方で1990年代から現在まで、研究テーマとしてのペットロスは学際的な色あいが濃く、これまで社会学・心理学・精神医学・死生学など様々な分野から考察・検討が重ねられてきた。わが国においてペットとその飼い主を取り巻く環境が大きく変化し人と動物の関係性が劇的に変わってきた中、人と動物の関係における重要だが学際的な視座「ペットロス」について、どのように研究が進展してきたのだろうか。

本稿では、我が国におけるペットロスについての研究の動向を振り返り、ペットロスに関する研究の今後の可能性を探ることを目的とする。

方 法

1. 対象文献の選定

日本におけるペットとの死別体験、いわゆるペットロスに関する研究は心理学、社会学、精神医学、死生学等の分野で行われてきた。著者らの関心は高齢期におけるペットロスにあるが、文献を探し始めてすぐにそのような研究は極めて少ないことに気づいた。そこで、研究動向を概観するには研究対象/協力者の年齢範囲は問わず、またペットロスというテーマ自体が学際的なものであることを考慮して学問領域を限定せずに文献を収集することとした。

Google Scholar, CiNii, J-Stage, 医学中央雑誌に収録されている文献の本文を対象に「ペットロス」、「ペット and 喪失」、「ペット and 死別体験」をキーワードとして、1998年から2018年9月現在の期間を限定して検索した。検索された文献のうち、総説及び概説、症例報告、単行書、会議録、学会抄録以外の、オリジナルな知見を示した23本の文献について検討した。なお検索に際し、検索文献内の「ペットロス」という言葉の学術的定義の内容は問わなかった。

2. 文献の整理

選定された23本の文献を読み込み、著者及び発行年、対象者、動物の種類、調査方法、調査内容、結果について記述してある部分を抽出し、特徴を書き添えて表1にまとめた。

結果と考察

1. 掲載年次と調査内容の推移

1.1 テクニカルタームとしてのペットロス

著者らが時系列に沿って文献を整理していく中で気づいたこととして、今回選定された文献のうち、新山ら(2006)、池内ら(2009)、増田(2011)などに見られるように「ペットロス」が死別体験の一つとして示されるようになったことがあげられる。

悲嘆を伴うペットとの死別体験は、長らく非公認の悲嘆(Disenfranchised grief)として無視されてきた(Doka, 2002)。今回の調査結果から、ペットロスという現象についても調査研究のテーマとしては長らく意識されてこなかったことが推察される。これまで社会的に公認されてこなかった「ペットロス」という事象について、我が国では2000年代初頭から学術的に検討され始めていること、それまでは実証的な研究は見当たらず、総説や概説、一般書やエッセイといった形での出版物が多いことがその証左である。

表1 日本におけるペットロスに関する研究

番号	著者	対象者	動物の種類	調査方法	調査内容	結果	特徴
1	新島, 2001	対象者の属性等について言及なし (4事例を提示)	限定なし	インタビュー調査	4事例について、ペットの喪失体験に関する語りを分析。	ペットロスのつらさの生起・強化のプロセスと在り方、自身と他者との間で、ペットの死に対する意味づけにギャップが生じ、適切に悲しめなくなってしまうことを、「リアリティ分離」という語を用いて論じた。	ペットロスのつらさの生起プロセスに焦点を当て、飼い主とペットという二者関係だけでなく、飼い主とペットと他者という社会関係の中でペットロスのつらさが生まれることを指摘。
2	朝比奈, 2002	女子大学生 (n=24)	限定なし	インタビュー調査	過去に飼っていたペットとの別れについてのインタビュー調査にてペットを飼い始めたいきさつや印象に残っているエピソード、喪失の際のエピソード、現在の心境、将来自分の子どもにペットを飼わせたいかなどについて聞き取り、カテゴリー分析を実施。	子ども時代のペットロスによる悲嘆は成長の契機になりうることを示唆。	子ども時代のペットロスについて青年期の当事者の多くが人間的成長につながったと回答していることを指摘。
3	濱野, 2004	犬を喪失した経験のある19～68歳までの人 (n=48)	犬	オリジナルの質問紙	喪失直後と現在の感情について自由記述式の質問紙調査を実施。	喪失感情は喪失原因別に違いがみられた。病死では埋葬を経て死を受容している飼い主と自責感情を抱え続けている飼い主に分かれ、老衰死では犬が天寿を全うしたことに対する満足感を示していた。安楽死では死を選択したこと自責感が苦痛を伴って継続しており、失踪では当時の出来事を詳細に記述しショック、自責感を抱え、時間の経過とともに喪失したことを実感していったことを示唆。	喪失後の時間の経過による感情の変化、死因種別による悲嘆の違いを指摘。
4	新島, 2006	20代から70代の男女 (n=104)	限定なし	インタビュー調査	ペットロスについてのインタビュー調査で得られた特徴的な事例について検討。	「家族同様」と言われながらも亡きペットの存在感が状況や飼い主の死生観によって多様に変化し、時には「家族」とはかけ離れた解釈をされることで死を受け入れる準備をされていること、その解釈においてペットの死は様々な正当化がなされ、それがときには肯定されることを示唆。	飼い主の死生観により喪失後のペットの死の解釈が異なることを指摘。
5	新山ら, 2006	A県内の看護学生 (准看護学生も含む) (n=269)	限定なし	オリジナルの質問紙	看護学生の看護学校入学前の心的外傷の経験率、心的外傷的出来事の内容を明らかにすることを目的に、PTSD診断基準に関する4つの質問項目と「看護学校入学前の心的外傷的出来事」「看護学校入学前の心的外傷的出来事に対する主なコーピング」について自由記述で回答を求め、結果をKJ法に基づいて分析。	入学前の心的外傷体験の一つとしてペットロスがあげられており、その経験率が3.33%であったことが示されている。	ペットロスを心的外傷的体験ととらえる人が一定程度いることが明らかになった。
6	竹下, 2006	3年以内にペットとの死別を経験した男女 (n=125)	限定なし	オリジナルの質問紙	ペットに対する愛着の程度、日常生活におけるペットの存在感の程度、死別時の悲嘆の程度、死別による現在の精神的ショックの程度について質問紙調査を実施。	ペットに対する愛着の強さ、存在感の程度、死別時の悲嘆の強さ、ペットに対する愛着の強さ、死別による現在の精神的ショックの程度にそれぞれ関連がみられた。飼い主の性別、ペットの死の原因、死別の仕方、別れの儀式的の有無、周囲からのサポートの有無とその効果が死別時の悲嘆の強さと関連すること、飼い主の性別、生前のペットの位置づけ、死別の仕方が死別による現在の精神的ショックと関連することが示唆された。	生前のペットの位置づけや周囲からのサポートの有無によって精神的ショックが左右されることが明らかになった。

表1 日本におけるペットロスに関する研究（続き）

番号	著者	対象者	動物の種類	調査方法	調査内容	結果	特徴
7	濱野, 2008	3~6 歳児 (n=60) 幼児の保護者 (n=63)	限定 なし	インタビュー 調査 (幼児) オリジナルの 質問紙 (保護 者)	幼児のペットとの死別 (ペットロス) 経験と死の概念 (非可逆性, 普遍性, 生命機能の停止) の発達との関連, 幼児のペットロス経験による人格的発達を検討することを目的として調査。	ペットロス経験がある幼児は経験のない幼児よりも死の非可逆性を理解している者が多いことが明らかにされた。また, 幼児がペットと親密であるほどペットロス経験による人格的発達を遂げると両親は認識していることが示された。以上から, 3~6歳児の幼児の場合は, 死の概念の理解の発達には, ペットロス経験のような実際の死別経験が関連していることが示唆された。	幼児の死の概念の理解の発達にはペットロスのような実際の死別体験が影響することを指摘。
8	池内 ら, 2009	20~70代の成 人 (n=397)	限定 なし	オリジナルの 質問紙	死別による喪失に限らず様々な喪失 (環境, 離別, 自己, 物理的所有物, ペットなど) についてより包括的に検討すること, 喪失からの回復期間に影響を及ぼす諸要因について, その相対的影響力を比較検討することを目的として, アンケート調査を実施。	得られた結果の興味深い点として, ペットの喪失からの回復過程が挙げられている。基本的な回復過程において “罪責感” というのが一つの特徴的な反応であり, 自分が直接ペットを死に追いやったわけではないが, 異変に気づかなかったことに対する無念さの現れであると考えられることを指摘。	様々な喪失の中で特徴的なものとしてペットとの死別体験があることを指摘。
9	木村 ら, 2009	異なる3大学 でそれぞれ医 学, 獣医学, 文学を専攻す る学生 (n=99)	限定 なし	オリジナルの 質問紙	ペットロス「症候群」と名付けることの影響について, 自由記述式の質問紙調査を実施した。内容分析の手続きにより全13,475字の記述内容から142個の最小分析単位を抽出, 4グループから成る18個のコードが生成された。このコードを基本的発想データ群としたKJ法の手続きにより分析。	「命名の是非」は「病名の妥当性」と「病名の影響」から判断されるという構造が想定された。また, ペットの喪失に伴う「悲嘆への認識」は個人で異なることがあり, それが「病名の妥当性」と「病名の影響」の双方に影響を及ぼす可能性が示唆された。	ペットロスを病理として扱うことの負の影響を指摘。
10	佐久 間, 2010	10~70代のペ ットの飼い主 (n=50)	限定 なし	オリジナルの 質問紙	ペット飼い主におけるコンピタンスの機能状態を把握する目的で, 飼い主用コンピタンス尺度の作成を試みた。質問項目は, 熊大式コンピタンス尺度における質問主旨をペット飼い主に置き換えて作成, グループ主軸法による因子分析を実施。	ペット飼い主用尺度は全体として内的一貫性による信頼性が高く, 妥当な項目構成であった。	飼い主のコンピタンスの機能不全としてペットロスを捉えたうえで尺度を作成。
11	得丸 ら, 2010	大学生 (n=387)	限定 なし	オリジナルの 質問紙	ペットロスやペット葬についての意識を探るためにペット飼育経験の有無, ペット葬の経験の有無や回復過程について, 協力者の属性等背景情報についての質問などから成るアンケート調査を実施。	「共同努力型人生観」は最もペットロスに陥りやすく, 「金銭重視型人生観」はペット葬に否定的であること, 男性に比して女性のほうがペットロスに陥りやすいことが明らかになった。自由記述ではペット葬賛成派が6割を占め, ペット葬反対派も回答としては反対であるが記述を考察すると賛成派であった。ペットロスによる悲嘆からの回復の契機としては「時間の経過」が最多であり, 新たな記述としてペットロスによるペットについての知識やペットロスについてあらかじめ学習しておくというものが得られた。	ペットロスによる悲嘆への人生観の影響と, ペット葬自体を否定する人の少なさが明らかになった。
12	増田, 2011	女子大学生 (n=196)	限定 なし	オリジナルの 質問紙	死についての意識の経験の有無などと死の意識の経験についてその発達段階と内容, 身近な人や可愛がっていた動物との死別経験, 死のイメージなどについてのオリジナルの質問紙を実施。	死の意識はこれまでの死について考えた経験が死についての意識の各項目に影響していることが現れた。死別経験については, 身近な人より可愛がっていた動物との死別経験の方が死への意識を駆り立てているようであった。	身近な人との死別よりも, ペットとの死別経験の方が死への意識を強く感じさせることが明らかになった。

表1 日本におけるペットロスに関する研究（続き）

番号	著者	対象者	動物の種類	調査方法	調査内容	結果	特徴
13	加藤, 2012	介護保険サービスの利用者 (n=4) 利用者のペット飼育支援に関わる可能性のある専門家 (n=4)	限定なし	インタビュー調査	利用者自身に関する事柄、現在飼育している、あるいは過去に飼育した中で最も印象に残っているペットに関する事柄、ペットを飼育する上で利用者が直面する問題点・心配事の3点について半構造化面接を実施。	ペットを亡くした利用者は、ペットとの関係に基づいてペットと生活史を結びつけていることが明らかになった。対照的に、支援者は、利用者がペットをケアしていく上での困難を強調することが多かった。これを受けて高齢者とペットとの関係を支援する方法として、高齢者の物語を注意深く聞くこと、ソーシャルサポートのネットワーク、特に「物語のコミュニティ」を構築する必要があることが示唆されている。	高齢者の生活におけるペットという存在の意味深さと、実際に飼育を支えることの困難感を指摘。
14	大曲, 2012	小学校2年生 (n=228) 4年生 (n=198) 6年生 (n=186)	限定なし	既存の尺度オリジナルの質問紙	死の意識と死別を伴う喪失体験との関係性について検証することを目的に、死を考えた体験と子どもの自尊感情について全般的セルフエスティーム尺度、子ども用5領域自尊心尺度、オリジナルのアンケート調査を実施。	2・4年生に比べ、6年生の4人中3人が自分の死を考えたこと、2年生の児童は「生き物の死」の体験が、6年生の児童では「身近な人の死」の体験が死の意識と関係性があるという分析結果を得た。またポーブの自尊心尺度において、「死を考えたことがない子ども」の方が「死を考えた子ども」より自尊感情が高く、有意差が見られた。	ペットを含めた生き物の死の体験が子どもの死の意識と関連することを指摘。
15	濱野, 2012	都内の小学生 4～6年生 (n=219)	犬 猫 鶏	オリジナルの質問紙	質問項目は大きく分けて3つ、生命尊重について、動物（イヌ・ネコ・ニワトリ）への態度について、悲嘆を伴う死別経験についてで、回答は5件法。	多くの小学生は命を大切にせねばならないという意識は高く持っているものの、動物の種類によって好き嫌いの程度に差があり、その好き嫌いの程度が動物保護・動物愛護の意識に差をもたらしていることが分かった。また過去に悲嘆を伴う動物との死別経験がある児童の方が、それが無い・わからない児童よりも動物愛護の意識が高かった。一方で大切な人との死別経験は動物の態度との関連が見られなかった。	子どもの動物愛護の意識に悲嘆を伴う動物との死別体験が影響することを指摘。
16	杉山, 2013	盛岡市と八戸市の保育園各1園の保護者 (n=96)、幼稚園1園の保護者 (n=107)	限定なし	オリジナルの質問紙	保育所と幼稚園の保護者から、子どもが「死」について話したエピソードを2回に分けた質問紙調査から収集し、その内容をテキストマイニングとコレスポネンシ分析によって分析。	子どもが死に関心をもつきっかけとして6つの変数を確認し、関心のあり方としては、死への関心、死者への関心、未来の死（への気づき）の3つのパターンを見いだすことができた。その中で、ペットの死が死に気づききっかけの一つになりうることを指摘。	子どもが死に関心を持つきっかけとしてペットとの死別があることを指摘。
17	増田, 2015	女子大学生 (n=140)	限定なし	既存の尺度オリジナルの質問紙	東海地方に居住する調査対象である女子大学生が、東日本大震災を経験することによって死をどの程度身近に感じたか、既存の死の不安尺度（DAS）の因子分析を試みるとともに、不安と死の身近さの程度との関係を調査。	41.4%が人格的発達に影響を与えた死別体験としてペットとの死別を挙げた。死別経験者では、他者とペットの両者の経験者が最も高かったが、重要な他者と動物の間には統計的な差が認められず、むしろ平均値で見ると動物のみの群の方がわずかではあるが高かったことを指摘。	ペットロスが人格的発達に影響を与えるものであることを指摘。
18	増田ら, 2015	大学1年次の、犬との死別経験者 (n=141)と猫との死別経験者 (n=55)	犬 猫	オリジナルの質問紙	自由記述式アンケートにて「もう一度、亡くしたペットに会えるなら何をしてあげたいか？」ということについて質問。回答として得られたものをテキストデータ化してテキストマイニングを行い、文字数、単語数を比較して分析。	猫の飼育経験者の回答文は文字数、単語数共に犬の飼育経験者よりも有意に多いことが判明した。さらに数量化 III 類解析 (n=149) においても、犬と猫の飼育経験者で有意な差が認められ、犬の飼育経験者は懐古的な内容を、猫の飼育経験者は惜別の内容を記述すると考えられた。また、犬の飼育経験者の文字数、単語数は、飼育していたイヌの大きさによって有意に異なった。	ペットロス後の文章表現において犬の飼育者と猫の飼育者で違いがみられることを明らかにした。

表1 日本におけるペットロスに関する研究（続き）

番号	著者	対象者	動物の種類	調査方法	調査内容	結果	特徴
19	二階堂ら, 2015	ペットとの死別経験のある中高年者 (n=4)	犬	インタビュー調査	ペットと死別した高齢者への2つのインタビュー調査から、ペットとの死別による悲嘆の適応を支える要因を抽出することを試みた。研究1では飼い主の適応の支えとなる要因を抽出し、質的に検討。研究2では亡くなったペットと飼い主のあいだの“継続する絆”の詳細について質的に記述・検討。	調査協力者は皆、家族や友人などから社会的支援を受けており、亡くなったペットに対しては火葬・納骨などの儀式を行う、供花する、写真に話しかけるなどの行為が見られた。今後の課題として、亡くなったペットと飼い主の継続的な絆の特有さ、世代を軸とした調査とペットロスにおける継続する絆の機能についての調査の必要性が示された。	飼い主と亡くなったペットの間に「継続する絆：Continuing Bond」が存在することを指摘。
20	木村ら, 2016	2009年9月から2010年8月の間、亡くなった動物を火葬する目的で東京と愛知の動物火葬施設を訪れた22～68歳までの遺族	限定なし	既存の尺度	GHQ28, 社会的再適応評価尺度 (SRRS), Companion Animal Bonding Scale (CABS), Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansai Gakuin (FACESKG) を使用。死別直後に調査票200部を配布しそのうち40部が返送された。回答の返送があったうち、死別後21日以内の者を対象として、さらに死別2カ月後、4カ月後の時点で回答者の自宅にGHQ28を送付し、初回と同様に回答の返送を求めた。	死別直後で 22/37名 (59.5%), 2カ月後で17/30名 (56.7%), 4カ月後で 11/27名 (40.7%) の遺族がリスク群と判定された。また、心身の症状に影響のある要因として、遺族の年齢、動物との関わり方、家族機能が挙げられた。ペット喪失後の問題を減らすためには、こうした要因をもつ飼育者に獣医療従事者が事前に気づき、予防的な対応をとることが重要と指摘。	死別後に深刻な心身の症状が見られるペットを亡くした飼い主が一定程度いることが明らかになった。
21	後藤, 2016	都内の私立大学に通う学生1年生～4年生 (n=280)	限定なし	既存の尺度 オリジナルの質問紙	大学生の死生観形成の要因について明確にすることを目的として、死別経験の有無と死別経験の内容についての自由記述式の質問紙と死に対する態度尺度改訂版 (DAP-R) を実施。	死別経験が死生観形成を司る大きな要因ではなく、一要因にすぎないことが明らかになった。しかし、死別経験が大きなきっかけであったと回答した学生も多くおり、死別した対象の中には、ペットを亡くした経験を挙げているものも多かった。大学生が生や死について考えを巡らせるきっかけとしてペットとの死別体験が多く挙げられていることに言及している。	大学生の死生観形成にペットとの死別体験が与えるインパクトの大きさが明らかになった。
22	坂口ら, 2018	大学生 (n=206)	限定なし	オリジナルの質問紙	大学生における「ペットロス」経験の実態を探索し、ペットロス経験者への支援と社会的な理解の促進のためのツールとしてリーフレットの作成を試みることを目的として、ペットロスの経験、ペットロスに伴う悲嘆反応、ペットロスに対する対処方法について、既存の尺度を参考にして作成したオリジナルの質問紙調査を実施。	大学生の半数近くが、過去にペットを亡くしてつらい経験をしたと回答しており、いわゆるペットロスは児童期・青年期において身近な喪失体験の一つであると考えられる。また衝撃の大きかったペットロスの対象は必ずしもイヌやネコだけではなく、ハムスターやウサギ、魚なども挙げられた。このことは、児童期・青年期でのペットロスに関しては、イヌやネコに限らず小動物や魚などとの死別も大きな喪失体験となり得る可能性を示唆している。併せてペットロスにより生じられる悲嘆の多様性も指摘しており、それを踏まえてペットロスについての当事者・周囲への理解啓発のためのリーフレットを作成した。	ペットロスの身近さと大きな喪失体験となりうる動物の種類の多様さ、それに起因する悲嘆の多様さが明らかになった。
23	増田, 2018	女子大学生 (n=206)	限定なし	オリジナルの質問紙	孤独感と内的作業モデルに及ぼす死別経験と死の不安の影響についての質問紙調査。その中で特徴的な死別体験としてペットロスを取り上げている。	ペットとの死別経験後の症状をその時期と動物の種類の観点から、人との死別と比較しながら分析するとともに、死別経験の対象の違いによる「死の不安」の差異についても検討。ペットロス症状の分析では、死別経験の時期の効果があらわれ、中学生以降の方が影響は大きく、全体の症状、「やる気の減退」など3項目でもそれが示された。	ペットロスの時期により飼い主の心理状態に違いがみられることが明らかになった。

2000年代初頭の研究は主に、動物飼育やペットロスが個人の成長・発達に与える影響にフォーカスしたもの（朝比奈，2002；濱野，2008），ペットロスを他の死別体験・喪失体験とは区別し独立したトピックとして扱った研究（濱野，2004；竹下，2006）が目立つ。

しかしそれに続く新山ら（2006）では、回答者の3%あまりが飼育していたペットとの死別を心的外傷的体験として挙げたことを指摘しており、池内ら（2009）などではペットロスが、児童期や青年期に経験される喪失体験の一つとして特筆されている。また増田（2011）は身近な人との死別よりもペットとの死別経験の方が死への意識を駆り立てていることを指摘するなど、ペットロスについて他の喪失や死別と同列に扱っている研究が見られるようになった。これらの研究では結果や考察において、ペットとの死別体験の特徴や重要性が指摘されることも多く、ペットとの死別が飼い主にとって重要であること、喪失や悲嘆の研究領域にペットロスがテクニカルタームとして新たに定着したと見てよいだろう。

しかしながら、ペットロスを直接的に取り扱わず多様な死別体験の中の一つとして相対化した研究の限界点として、ペットロスという死別体験そのものについてより深く検討することは難しいことが挙げられる。

また、2000年代当初から現在に至るまで「ペットロス」という言葉の定義については未だ十分な検討はなされていないことにも留意したい。かつては“ペットロス症候群”と称して、あたかもペットを溺愛した飼い主が陥る病理であるかのように表現され、また研究によっては単なる喪失体験と位置付けたり、逆に喪失後の悲嘆反応まで含めたりするなど定義も曖昧であった（木村ら，2009）。今回の調査でも、ペットロスという言葉の定義については先の木村の指摘の通り、研究内容や分野によっていまだ定義に微妙な違いが見られた。おおむね「飼育動物との死別体験」、「悲嘆を伴う飼育動物との死別体験」、「飼育動物との死別体験による悲嘆」の3つに大別されるため、今後の研究の進展・蓄積によりペットロスという用語の学術的定義がより明確になることが期待される。

1.2 動物の種類

研究対象者が喪失した動物の種類については、掲載年次にかかわらず、種類を限定していない研究が19本（番号1，2，4～14，16，17，20～23）と多かった。

愛玩動物を半ばモノや所有物のように見なすような「ペット」という概念に代わって、昨今ではコンパニオンアニマル（伴侶動物）という概念が海外では一般的であり、日本でもそれが広まりつつある。コンパニオンアニマルの定義は様々だが、おおむね、家畜化されてからの歴史が長い犬・猫がその代表と言えるだろう。両者とも15年前後と比較的寿命が長く、スキンシップも取りやすいため、愛着関係を容易に築くことができる。また、犬や猫を中心とした獣医療の進歩により寿命が延び、老犬・老猫介護が必要となるケースもある。

翻って、モルモットやハムスターなどの小動物や小鳥の寿命は犬・猫と比較すると短い上、体格も小さく、多くはかごの中を中心として飼うことから、犬や猫とは関係の質が異なるだろう。同様に、爬虫類や両生類、魚類との関わりはスキンシップや人間のコミュニケーションをとることよりも観察することに重きが置かれやすいだろうことが想像される。

種類の限定がない理由としては、調査者がコンパニオンアニマルの代表格である犬・猫について回答されることが自明のことと考えていたり、動物による関係性の違いに気づかずに調査が進められていたりすることが考えられる。

一方で、例えば濱野（2012）は、対象となる小学生にとって身近にあり、また関係性の違いが表れることが想定される動物として、動物の種類を犬・猫・鶏に限定している。

ペットロスの実態を把握することを目的の一つとした坂口ら（2018）では失って最も衝撃の大きかったペットの種類を限定せず尋ねたところ、ペットロス経験者95名のうち、犬との回答が27名と最も多く、全体の28.4%，次いでハムスターが19名（20.0%）と多く、以下魚11名（11.6%），猫8名（8.4%），ウサギ8名（8.4%）の順であったという。これについて坂口らは最初の想定に反して犬以外の魚類や小動物との死別をつらい経験ととらえる人が多かったことを指摘している。これは新しい発見だが、研究対象者と動物の関係性について詳細に検討するのであれば、やはり動物の種類は限定した方が、特徴がより明確になるのではなかろうか。

喪失した動物と飼い主の関係は個性が高く、どのような動物とどのような関係を築くかは人それぞれとも言えるが、動物の種類が異なればその生態や飼育スタイルなどの違いにより、飼い

主との関係性にも違いが出ることが予想される。今後はそれを踏まえ、飼育動物の種類に留意した研究が求められるだろう。

2. 対象者のライフステージとペットロス

2.1 子ども・若者とペットロス

対象者について、年齢の範囲が明記されていないものが1本（番号1）、研究対象者が幼児・児童、大学生など若年層であるものが13本（番号2, 5, 7, 9, 11, 12, 14, 15, 17, 18, 21~23）と最も多く、次いで成人が5本（番号4, 6, 8, 16, 20）、19~68歳、10~70代と幅広い年代を対象にしたものが2本（番号3, 10）だった。

我が国では愛着研究の流れに即した研究や、教育的観点からの研究が活発に行われてきた。特に小学校におけるいのちの教育はその歴史も古く、早くから動物飼育を取り入れた実践が行われていた。生命尊重の教育の観点から動物との死別経験をとらえた濱野（2012）や、いのちの教育のバリエーションの一つとしてのペットロスについて探ることを目的の一つとした得丸ら（2010）らはこの流れをくむものであろう。どちらも、子どもにとってのペットロスと死の意識やペット葬への意識を既存の研究に合流させつつ、ペットロスの特異性についても触れている。

また、幼児のペットロス体験については、数は少なかったものの濱野（2008）は子どもの死別体験を間近で見てケアをする立場にある親をも対象者とし、杉山（2013）は子ども本人ではなく親への調査をすることで、それぞれ子どもの死別体験を多角的に、そして大人の目を通してできるだけ客観的にとらえようとしている。

大学生を対象とした調査研究が10本（番号2, 5, 9, 11, 12, 17, 18, 21~23）と最も多いことについても、同様に客観性を担保し、また回答にあたって求められるだけの言語表現力や時として侵襲的になりやすい質問への耐性などがあるとみられる年代であることが大きいと思われる。

ペットとの死別は幼児期~青年期にある飼い主にとって死を意識したり考えたりすることに適した教材であり（井上ら、2005）、動物との死別経験のある幼児の方が死についての理解が深いことがすでに指摘されている（濱野、2008）。また大学生にとっても身近な人よりもペットとの死別体験の方が、死への意識を強く駆り立てていることや（増田、2011）、死生観の形成にもペットとの死別が大きなインパクトを与えることが報告されている（後藤、2016）。

以上のように、若年層のペットロスについては、成長・発達の契機として見られることが多いことが分かった。しかし一方で中高生を対象とした調査研究は見当たらなかった。その理由は様々なことが考えられるが、今後は多感な思春期や青年期前期にペットと死別することの影響を調査することも必要なのではなかろうか。

2.2 高齢者とペットロス

若年層を対象とした研究が多い一方で、研究対象者の年齢範囲を中高年~高齢者に限定した研究はわずか2本（番号13, 19）であった。

高齢者とペットの関係は、人と動物の関係について論じられ始めたごく初期からQuackenbush（1984）、Sable（1995）、佐久川ら（1999）、安藤（2001）などが、飼育動物との別れまでを含めて議論している重要な論点の一つである。しかしながら今回の調査により高齢者とペットロスについての調査研究はあまり深まっていないことが明らかになった。

加藤（2012）は、インタビュー調査からペットとの関係が高齢者の生活史と結びついていることを見だし、一方で介護サービスを提供する側は、高齢者がペットを世話していく、飼育を継続していくことの困難さやペットと死別した時の対応に苦慮している側面もあることを指摘した。

また二階堂ら（2015）は、死別体験において故人との継続する絆（Continuing Bond）が適応的に作用するというKlassら（1996）の指摘をもとに、継続する絆が飼い主と喪失した動物の間にも存在し飼い主の適応を支えていること、友人や知人、飼い主仲間からのサポートも飼い主の適応に寄与していることを明らかにした。

高齢期にある飼い主にとっては現在共に暮らしている動物が人生最後のペットとなる可能性は高いだろう。しかしそのことがその飼い主の、ペットとの死別体験における精神活動に影響を及ぼしているかどうかは未知である。また自らの人生の終着点を意識せざるを得ない高齢者にとって、ペットとの死別はどのような意味を持つのだろうか。今後は高齢化社会を迎えて久しい我が

国で高齢者が置かれている環境や高齢者自身の健康寿命、ライフスタイルの変化を顧みつつ、高齢者のペットロスについて調査していく必要があるだろう。

3. ペットロスへの理解

重篤なペットロスについての研究や、心的外傷体験として、またサポートすべきものとしてペットロスを扱っている研究は4本であった(番号5, 6, 10, 20)。

心理学や精神分析の領域では、ペットとの死別は典型的な対象喪失として扱われてきた(小此木, 1979)。木村(2017)が指摘する通り、ペットと死別した飼い主の中には、重篤な悲嘆を抱えたハイリスクな人が一定数おり、ペットとの死別経験が心的外傷として体験されることもあり得るため(新山ら, 2006)、ペットとの死別による悲嘆が重篤化しないよう、対策を講じる必要があるだろう。

一方で対象喪失の多くは適応可能なものであり、ペットロスに関しても同様だろうと思われる。ペットと死別した後の適応と悲嘆の重篤化の分かれ目を特定した研究はまだないが、竹下(2006)は死別後の飼い主の精神活動について調査し、飼い主の性別、ペットの死の原因、死別の仕方、別れの儀式の有無、周囲からのサポートの有無とその効果が死別時の悲嘆の強さと関連することを明らかにした。このことは、今後ペットと死別した飼い主へのサポートやケアを調査していくうえで重要な指摘と言える。

また佐久間(2010)は飼い主のコンピタンス不全状態をペットロスであると考え、飼い主のコンピタンスを的確にとらえて困難に直面している飼い主を適切にサポートするための指標として、飼い主のコンピタンス尺度の作成を試みている。坂口ら(2018)も、質問紙調査から大学生における「ペットロス」経験の実態を探索するとともに、ペットロス経験者への支援と社会的な理解の促進のためのツールとして、リーフレットを作成した。こういった、飼い主の状態の把握やペットロスへの理解の促進を目的とした研究は、サポートが必要な飼い主のもとにそれが届くための一助となると考えられる。

しかし、若年層のペットロス、特に子どものペットロスの研究については、死別による悲嘆の重篤化の予防や重篤化した場合の具体的なケアまで踏み込んで考察をした研究は見られない。この理由は不明だが、ペットと死別した子どもにはサポートの必要があまりないということではないだろうし、年齢が上がるにしたがって悲嘆へのケアが必要になるというわけでもなかろう。先述したように、中高生のペットロスについての研究の不足とあわせて、ペットロスへのサポートが必要な幼児・児童・生徒についての研究も今後進めていく必要があるだろう。

また、実際の臨床場面においてペットロスがどのように表れ、どのようにケアされているのかは、ペットロスをきっかけに重篤な状態に陥った症例報告の数が少ないため不明である。ペットロスが重症化したケースについての症例報告の少なさから見ても、臨床場面ではペットとの死別による悲嘆が重要視されにくいという可能性が捨てきれない。

こういった背景から、ペットロスへの理解に関する研究については、ペットと死別した飼い主の精神活動について理解し、必要なサポートを探るためにも、今後の動向に注目すべきだろう。

4. 個人間あるいは社会の中のペットロス

心理学や精神医学において、ペットロスはいわば個人内の体験、個人の精神活動にかかわる事象として扱われており、ペットと飼い主以外の第三者との相互作用や社会関係まで含めた視点から見ることは稀であることも一つのポイントであろう。

その点において、新島(2001)がペットロスのつらさが二者関係だけでなく、第三者との関係の中—飼い主と他者とのリアリティ分離—からも生起し得ることを事例から指摘したことはインパクトが大きいと考える。

これにつながる研究として、介護サービス利用者だけでなく支援者をも調査対象とした加藤(2012)は、高齢者の生活史と分かちがたいものとしてペットの存在や別れを取り上げ、ケア提供者である支援者が、ペットとの関係を含めた、サービス利用者の生活全体を支えていくことが重要であると指摘している。

また社会におけるペットロスの取り扱いについて木村ら(2009)は、死別に際しての飼い主の悲嘆を“ペットロス症候群”と称することの妥当性の薄さを指摘し、そのように命名することの

影響についてさらなる研究が必要と述べている。木村（2017）はさらに、精神医学的観点からとらえたペットロスと区別して疫学的観点からペットロスを捉える際には、疾病定義として「ペットロスに伴う悲嘆反応が、大うつ病等の基準を満たすほど重度になった場合」を用いるのが妥当であろうと独自に示した。

ペットロスを含めた喪失体験やその語りは、個人内に秘められた体験にとどまるものでは到底ない。しかし Doka が指摘したように、ペットの喪失体験は社会的に公認されないがゆえに秘めざるを得ないという側面も未だあろう。ペットロスへの理解について検討していくうえで、そのような社会と個人とのあいだで起こる事象として、ペットロスを捉えていくことも必要なのではなかろうか。

まとめ

日本における 23 本のペットロス研究をレビューして、次のことが明らかになった。

まず、本邦におけるペットロス研究の流れの中で、現時点では悲嘆や喪失、心的外傷などに関する研究において、テクニカルタームとして「ペットロス」が認知されるようになったことが上げられる。

次に、ペットロス研究の対象者としては、子どもや若者が中心になりやすく、現在最も多い中高年期～高齢期にある飼育者のペットロスについての研究はあまり進んでいないと言えるだろう。したがって、今後はライフサイクルや飼い主のライフステージを意識しつつ、高齢期に差し掛かっている飼育者のペットロスについて知見を深めていく必要があると考える。

加えて、ペットロスは多くが適応可能な対象喪失である一方、様々な要因から重篤化したり心的外傷的な体験と化したりすることも考えられる。ペットと死別した飼い主にとって必要なサポートを探るための研究を蓄積していくことも必要だろう。

絆を育んだ動物と死別するという経験は、他の喪失と同様個人的なものでありつつ社会的なものでもある。その全容を明らかにするには、飼い主個人の精神活動などの心理的側面だけでなく、周囲との相互作用など社会関係も意識した研究が必要と考える。

文献

- 安藤孝敏 (2001). 高齢者とペット動物 老年社会科学, 23, 25-30.
- 朝比奈千絵 (2002). 青少年期における飼育動物の喪失 (ペットロス) 体験に関する探索的研究 教育臨床心理学研究紀要, 5, 181-194.
- Doka, K. J. (2002). Disenfranchised grief. In Doka, K. J. (Ed.), *Living with Grief: Loss in Later Life* (pp.159-168). Washington, D.C.: The Hospice Foundation of America.
- 後藤有紀 (2016). 大学生における死生観形成の要因 北星学園大学大学院論集, 7, 141-149.
- 濱野佐代子 (2004). コンパニオンアニマル (犬) 喪失後の飼主の心理過程犬の喪失原因別にみた、飼主の喪失感情 アニマル・ナーシング, 9, 58-62.
- 濱野佐代子 (2008). 幼児の動物の死の概念と、ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究——幼児の死の概念とペットロス経験の関連—— 発達研究, 22, 23-36.
- 濱野佐代子 (2012). 小学生の対象喪失の悲嘆経験と動物への態度との関連: 生命尊重の教育に資するために 帝京科学大学紀要, 8, 93-99.
- 池内裕美・藤原武弘 (2009). 喪失からの心理的回復過程 社会心理学研究, 24, 169-178.
- 井上ひとみ・岡田洋子・菅野予史季・志賀加奈子・荃津智子・井上由紀子 (2005). 小学生を対象とした Death Education の実践と評価——小学 2 年生の記述内容の前後比較より—— 石川看護雑誌, 3, 65-75.
- 一般社団法人ペットフード協会 (2017). 平成 29 年全国犬猫飼育実態調査 (<https://petfood.or.jp/data/chart2017/index.html>) (2018 年 9 月 1 日)
- 加藤謙介 (2012). 地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題 (2) ——「喪失の語り」と「支援」をめぐる語り—— 九州保健福祉大学研究紀要, 13, 1-8
- 木村祐哉・川畑秀伸・大島寿美子・片山泰章・前沢政次 (2009). ペットロス体験を「症候群」と称することによる影響 ヒトと動物の関係学会誌, 24, 63-70.
- 木村祐哉・金井一享・伊藤直之・近澤征史朗・堀泰智・星史雄・川畑秀伸・前沢政次 (2016). ペットロスに伴う死別反応から医師の介入を要する精神疾患を生じる飼主の割合 獣医疫学雑誌, 20, 59-65.
- 木村祐哉 (2017). ペットロスの疫学 獣医疫学雑誌, 21, 16-18.
- Klass, D., Silverman, P. R., Nickman, S. (Eds.) (1996). *Continuing bonds: New understanding of grief*. Washington, DC: Taylor & Francis.

- 増田公男 (2011). 女子大学生における死の意識に関する調査 金城学院大学論集. 人文科学編, 7, 93-101.
- 増田公男 (2015). 女子大学生における死の不安および人格的発達におよぼす死別経験の効果——東日本大震災の経験を通して 金城学院大学論集. 人文科学編, 12, 82-96.
- 増田公男 (2018). 孤独感と内的作業モデルに及ぼす死別経験と死の不安の影響 金城学院大学論集. 人文科学編, 14, 30-43.
- 増田宏司・田所理紗・土田あさみ・内山秀彦 (2015). 犬と猫の飼育経験者では、亡くしたペットに対して「もう一度会えるなら、してあげたいこと」の内容が異なる 東京農大農学集報, 60(3), 151-155.
- 内閣府(2010). 動物愛護に関する世論調査 平成 22 年 9 月調査
(<https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-doubutu/index.html>) (2018 年 9 月 1 日)
- Nieburg, H.A., & Fischer, A. (1996). *Pet loss: a thoughtful guide for adults and children*. Harper Perennial.
(ハーバート・A・ニーバーク, アーリン・フィッシャー. 吉田千史・竹田とし恵(訳)(1998). ペットロス・ケア 読売新聞社)
- 新島典子 (2001). ペット喪失体験 (ペットロス) はなぜこんなにつらいのか——リアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化について 現代社会理論研究, 11, 225-238.
- 新島典子 (2006). 飼主の死生観と亡きペットの存在感:「家族同様」の対象を亡くすとは 死生学研究, 7, 165-188.
- 新村出(編)(2008). 広辞苑 (第六版) 岩波書店.
- 二階堂千絵・安藤孝敏 (2015). ペットと死別した高齢者の適応を支えたもの: 死別したペットとの Continuing Bond に着目して 技術マネジメント研究, 14, 13-22.
- 新山悦子・塚原貴子 (2006). 看護学生の入学前の心的外傷経験とコーピング 川崎医療福祉学会誌, 15, 595-599.
- 小此木啓吾 (1979). 対象喪失——悲しむということ 中央公論新社
- 大曲美佐子 (2013). 小学生の死の意識と喪失体験及び自尊感情との関係性について 教育諸学研究, 26, 3-16.
- Quackenbush, J. (1984). Pet Bereavement in Older Owners. In Anderson, R. K., Hart, B.L., & Hart, L. A. (Ed.), *The Pet Connection: Its Influence on Our Health and Quality of Life* (pp. 292-299). Center to Study Human-Animal Relationships and Environments, University of Minnesota.
- Sable, P. (1995). Pets, attachment, and well-being across the life cycle. *Social work*, 40, 334-341.
- 坂口幸弘・米虫圭子・梅木太志 (2018). ペットロス経験者のためのリーフレットの作成 *Human welfare*, 10, 93-102.
- 佐久川肇・保住芳美 (1999). 老人とペットの関わりについて 川崎医療福祉学会誌, 9, 145-148.
- 佐久間伸一 (2010). ペット飼い主用コンピタンス尺度の開発 医学と生物学, 154, 603-612.
- 杉山幸子 (2013). 幼児はどのようにして「死」に気づくのか——テキストマイニングによるエピソードの分析—— 八戸学院短期大学研究紀要, 37, 11-20.
- 竹下遥 (2006). ペットロスに関する研究——悲嘆と精神的ショックに関連する要因の検討 臨床発達心理学研究, 5, 3-12.
- 得丸定子・佐藤英恵・郷堀ヨゼフ (2010). 人生観によるペットロス, ペット葬の関係について 上越教育大学研究紀要, 29, 257-268.
- 宇都宮直子 (1999). ペットと日本人 文藝春秋.
- 鷺巣月美(編)(1998). ペットの死, その時あなたは 三省堂
- 矢野経済研究所(2018). 2017 年度ペット関連総市場規模は前年度比 101.0%、1 兆 5,135 億円の見込～コンパニオンアニマル化により拡大～ (https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/1892) (2018 年 9 月 1 日)

The past and future of pet loss study in Japan: A Literature review

Chie Nikaido¹, Takatoshi Ando², Hazuki Kajiwara³

1 Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

2 Research institute of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

3 Rikkyo University institute of Social Welfare

Objectives: In the academic research, it is aimed to clarify the trend of pet loss research in Japan concerning "Pet loss", which is a relatively new concept, and to identify directions for future research.

Methods: Based on "Pet Loss", "Pet and Lost", "Pet and Bereavement" as a keyword, the documents contained in Google Scholar, CiNii, J-Stage, Medical Central Magazine were found to be 1998 to September 2018. The literature was searched without limiting the age range of the subjects and the academic field of the study. This is due to consideration that pet loss is an interdisciplinary theme. Of the retrieved articles, 23 literatures showing original knowledge other than reviews and outlines, case reports, monographs, conference proceedings, and academic abstracts were examined.

Results & Discussion: Expansion and penetration of "pet loss" as a technical term was observed, many researches targeting young people and adults and few middle-aged and elderly studies, necessity of research to deepen understanding of pet loss, the need for research from a psychosocial point of view became clear. In the future, while conscious of the life cycle and the owner's life stage, it is essential to deepen our knowledge of the pet loss experience of the owner who is approaching elderly, not only the psychological aspects such as mental activity of the owner but also the social relations.

Keywords: Pet loss, Companion animal, Bereavement, Loss, Literature review